

令和8年度 宇治市乳幼児教育・保育協働研修通信

みんなで創ろう! 『こどもまんなか』 研修

第1回開催 令和8年4月28日(火)

テーマ

「宇治市の乳幼児教育・保育を語り合おう」
～ともに生きて ともに育ち ともにつながる～

参加者内訳: 保育所(園)5名・幼稚園2名・認定こども園14名・小学校1名・療育施設5名

パネリスト



佐川 早季子先生

『基本理念を現場
から問い直す』

- ◆宇治市乳幼児教育・保育推進協議会会長/
研究・研修専門部会長
- ◆京都教育大学 教育学部
幼児教育科 准教授



杉本 一久先生

『いのちの発酵
としての保育』

- ◆宇治市乳幼児教育・保育推進協議会副会長/
発達・子育て支援専門部会長
- ◆宇治福祉園 理事長
- ◆みんなのき三室戸こども園
園長



松井 明恵先生

『1年間でどれだけ
おおきくなったかな…
5歳児3月の身体測定』

- ◆宇治市乳幼児教育・保育推進協議会委員/
保幼こ小連携専門部会長
- ◆こざくら学園理事長/
こざくら幼稚園園長

※ この研修通信は、研修での学びを広く共有するために、研修後の参加者の振り返りシートをもとに作成・発行しています。
園(校)内研修や日々の振り返りにご活用ください。
次回の研修へのご参加もお待ちしております。
ご質問等がございましたら、下記メールアドレスまでお気軽にお問い合わせください。

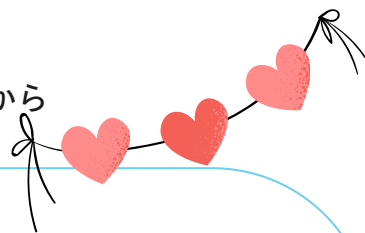
nyuyojicenter@city.uji.kyoto.jp





パネルディスカッションで心に残ったこと

参加できなかった仲間に共有したい、パネルディスカッションからの学びをキーワード別にまとめました。



「漂う時間」と 子どもの主体性

★「何もしない時間」の重要性

子どもが動いていない時間は「気持ちを立て直したり、整えたりするための必要な時間」であり、単に停止しているわけではない。



★ 大人の視点の転換

保育者や教師にとって、子どもが動いていない時間を「必要な時間」として見守る視点が求められている。

★ 意味ある行動

子どもの行動には意味のないものではなく、その子のリズムや色を尊重することが大切。

環境と素材 の役割

★ 時間も環境の一部

物理的な空間だけでなく、流れる時間そのものが子どもを育む環境である。



★ 偶然の活用

決められた計画だけでなく、偶然の出会いや素材との触れ合いから、教育や保育が湧き出していく。

★ 論理的思考の育成

身近な素材を活用し、体を動かし、自分と結びつく体験をすることで、子どもは論理的に考えやすくなる。

大人のあり方と 共育

★ とともに育つ姿勢

保育者や教師、保護者も完璧ではなく、お互いに喜びを感じ合い、ともに育っていく過程を大切にする。

★ 「命を感受する」

子どもの今の姿を丁寧に受け止め、大切にすること。

★ 楽しさとねらいの両立

子どものワクワクを大切にしながらも、ねらいを見失わない柔軟な対応が必要。





グループの意見交流で心に残ったこと

グループワークで共有された、明日からの教育・保育に繋げたい視点をまとめました。



1. 「漂う時間」と「やりたい」の保障

- ★ 「やりたい」が続く環境 : **安心、体験、環境（人・物）、時間**が巡ることで、子どもの「やりたい」という意欲が持続する。
- ★ 体験の深化 : ゆったりとした時間の中で、**体験的に学ぶ**ことの重要性。
- ★ 現実とのギャップと対話 : **一人ひとりのリズムを保障**したいという共通認識をもちつつ、現実の制約（時間や要領の難しさ）をどう乗り越えるか。



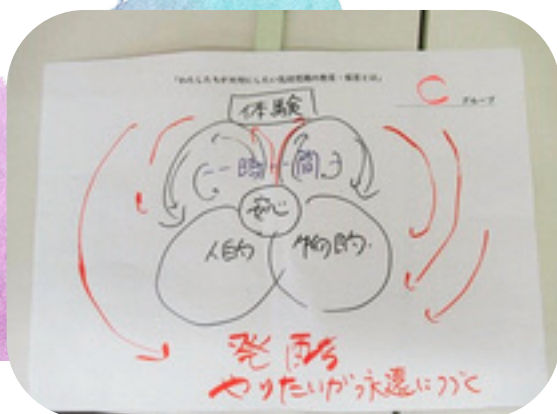
2. 大人の「胆力」と「余裕」

- ★ 持ちこたえる力 : 大人の計画を押し付けるのではなく、子どもの変化や姿を前に、じっくりと待つ「**胆力**」や「**余裕**」が不可欠。
- ★ 楽しむ心の共有 : 「子どもって面白い!」と**大人が笑顔で語り合える雰囲気**が、子どもの幸せに繋がる。
- ★ 子どもの姿を見取る : 他の子と比べるのではなく、**過去のその子と現在**を比較し、変化を受け止める視点を持つ。



3. 共通の願い

- ★ 根本は一緒 : 園や施設の方針は異なっても、「子どものワクワクを引き出し、主体性を尊重したい」という**根本の願いは共通**である。
- ★ 安心感の波及 : **子どもが安心できる**ことは、保護者の安心にも繋がります、結果として「子どもも大人も楽しい保育」が実現する。



明日からの実践で活かしたいこと

これまでの学びをどう現場に落とし込むか、参加者の皆さんの実践的な意気込みをキーワード別にまとめました。

1. 「余白」と「余裕」のある環境づくり

物理的・心理的余白

一日の流れを固定しすぎず、子どもが探求したり思いを巡らせたりできる「余白」を意識する。

作り込みすぎない

環境を最初から完成させず、子どもの発想や発見によって変化していく素材を配置する。

大人の心の余裕

大人自身が楽しむこと、面白がることを大切にし、その「心のはずみ」を子どもと共有する。

2. 「子どもの今」を捉える眼差し

「今、何を感じているか」の感受

一日のスケジュールを優先するのではなくその瞬間に子どもが何にワクワクし、何に興味を持っているのかを丁寧に見守る。

過去と今の比較

他の子と比較するのではなく、「その子の過去と今」を見比べることで、確かな成長のプロセスを捉える。

リズムの尊重

子ども一人ひとりが持つ異なる色やリズムに合わせ、寄り添った関わりを実践する。

3. 「湧き出す・響き合う」保育の追求

環境とねらいのバランス

柔軟な対応を心がけつつ、教育・保育の「ねらい」を見失わない丁寧な計画と実践を行う。

響き合いを大切に

素材や環境を介して子どもと響き合い、あそびが深まり（発酵し）、「やりたい」が湧き出してくるような瞬間を大切にする。

実践の交流

園内や他園・学校とも積極的に教育・保育について語り合い、学びを共有し続ける。

まとめ 今回の研修を通じて、多くの参加者が以下の3点を再確認していました。

1. 「待つ」という保育

子どもの「漂う時間」を無駄な時間ではなく、心と体を整える「必要なプロセス」として捉え直すこと。

2. 大人の「心と時間の余裕」

子どもの主体的なあそびや変化を受け止めるには、保育者自身の精神的な余裕と、それを許容する環境作りが必要であること。

3. 「ともに楽しむ」関係性

子どもの姿を面白がり、保育者・保護者がともに成長を喜び合うことが、良質な教育・保育の土台になること。

明日へのヒント

まずは「**大人が余裕をもつこと**」「**子どもが今何を感じているかを観察すること**」という、日々のちょっとした意識の変化からスタートしたいという声に参加者から多く挙げられています。これらを各園(校)で共有し、「皆が教育・保育を語れる環境」を作っていくことが、理想の実践への近道と言えます。